

発言要旨

広島大学大学院医系科学研究科 地域医療システム学
松本正俊

なぜ地域レベルの介護予防活動に医療者が向いているのか？

- 医療は地域に根差した職種である
- 地域において高齢者が最もよく集まる場所が医療機関であり、情報の中心地でもある
- 医療者は住民にも行政にも近い立ち位置にいる
- 医療者は患者の身体情報のみならず人格やプライバシーまで含めて職務上よく知っている必要がある
- さらに本人だけでなくその家族や交友関係まで把握している
- よって介護予防が必要なポピュレーションを適切に同定し、適切に介入しやすいポジションにいる
- また住民側も医療者を信頼する傾向がある

なぜ中山間地だとやりやすいのか

- 住民同士がお互いをよく知っており、助け合う文化がある
- 一つの地域に一つの医療機関、一つの介護施設、一つの役場、といった分かりやすい構造になっている
- 医療者、行政、住民のそれぞれの精神的距離が近い
- 広場や田畑など身体活動できる空間が多い
- 娯楽施設などが少なく、活動のニーズが高い

医療者にとってのメリット

- 普段医療機関に來ない住民と触れ合う機会になる
- 地域内で人的ネットワークを広げる機会になる
- 地域特性をより深く理解する機会になる
- 自身を住民により深く知ってもらえる機会になる
- 活動を介して行政や他業種との接点が増す
- 社会起業家social entrepreneurとしての経験が得られる
- これら経験を通して、自己成長や満足を得ることができ、また普段の医療活動にも好影響がある

行政にとってのメリット

- 行政主導の活動はニーズとずれたものになりやすい
- 医療者であれば介護予防活動を安心して任せられる
- 特定の団体や企業への利益誘導と見なされにくい
- 介護予防活動を通して住民の社会参画度が上がり、社会関連資本social capitalが増大する

越えるべきハードル

- 医療者はイベントのプロではない
- 医療者には本業があり、介護予防活動のみに時間を使うことはできない
- 手弁当では続かない
- どこまで行政が手を出すかの見極め
- 活動内容とアウトカム（介護予防）との関連の明確化